

社会福祉におけるレクリエーションの展開と課題 ～文部科学省検定教科書を通して～

滝口 真（西九州大学健康福祉学部）

1. はじめに

昨今、福祉施設における生活支援のあり方は、ユニットケア（大収容施設を数名の利用者単位にグループ構成し、各グループ毎に生活支援を綿密に行い、食事・入浴・排泄などの介護を行なう）、及びグループホーム（自立可能な認知症高齢者が1ユニット9名までを条件とし、小集団で生活する福祉施設。新設の場合は2ユニットまで許可されている。利用者対職員比率は3:1であり、きめ細かい生活支援が可能となる。昨今はホスピスケアの重要性も指摘されている）など、利用者への個別援助が重要視されてきている¹⁾。

このような福祉援助の動向のなか、近年のレクリエーション援助においても、利用者個人の生活歴をアセスメント（事前評価）し、援助計画したうえで、レクリエーション実践および評価を行なうことが求められてきている^{2) 3) 4)}。そこで、本報告では、社会福祉援助技術（ソーシャルワーク）におけるレクリエーションの位置付けを高等学校福祉科用文部科学省検定教科書から確認し、社会福祉分野におけるレクリエーションの展開と課題について若干の報告を試みたい。

2. 高等学校福祉科用 文部科学省検定教科書の概要

1) 監修及び著作者（掲載順）

監 修：大橋謙策（日本社会事業大学学長・日本学術会議第18期社会福祉・社会保障研究連絡委員会委員長・前日本社会福祉学会会長）

著作者：大橋謙策（前掲）・福山和女（ルーテル学院大学）・千葉和夫（日本社会事業大学）・宮城 孝（法政大学）・滝口 真（西九州大学）・斉藤くるみ（日本社会事業大学）

2) 検定意見通知と経緯（主なもの掲載）

- ①平成14（2002）年8月29日 文部科学省検定教科書『社会福祉援助技術』検定意見通知（文部科学省初等中等教育局）
- ②平成15（2003）年3月20日 文部科学省検定済
- ③平成16（2004）年1月20日 発行（発行所：中央法規出版）

3. 文部科学省検定教科書の第3章「レクリエーションの考え方と展開」について

1) 第3章 第1節 2 高齢者・障害者へのレクリエーション活動援助

(1) 高齢者・障害者の生活時間

①基礎生活（30万時間）、②社会生活（10万時間）、③余暇生活（30万時間）

※人生80年＝70万時間への生活支援がレクリエーション援助として理解されている。

(2) 高齢者・障害者へのレクリエーション活動援助の展開過程（当日配布資料参照）

2) 第3章 第2節 2 レクリエーションの計画策定

(1) 利用者の欲求と活動歴の確認

表 1: Aさんへのレクリエーション活動援助の取り組み ― 事前評価 (アセスメント) シート

記入者氏名: ○○××	記入年月日: ○○年 ××月 △△日 (□)
勤務先: △△市××デイサービスセンター	(職種名: 福祉レクリエーション・ワーカー)
利用者との関係: センター利用者と援助者 (福祉レクリエーション・ワーカー)	

利用者氏名: (イニシャル) A. M										(男性・ <input checked="" type="radio"/> 女性) 74 歳)	
特記すべき疾病・障害の程度: 白内障、うつ傾向、高血圧、左耳難聴											
A D L	移動	排泄	食事	更衣	入浴	視力	聴力	会話	麻痺	情緒・落ち着き	
	自立	自立	自立	自立	一部 自立	白内障 右 0.5 左 0.3	左耳 難聴	問題 なし	左 右 なし 上 上 下 下	うつ傾向	
レ ク リ エ ー シ ョ ン 関 連 情 報	人間交流			集団活動				個人活動			
	現在、うつ傾向 会話少ない			以前はあったが、現在はなし				なし			
余 暇 歴						レクリエーション活動援助にとって必要な情報					
生け花、書道、園芸						仲間とおしゃべりすることが好きであった。 ごく最近まで生け花や書道を趣味としていた。					
利 用 者 を 取 り 巻 く 環 境 な ど	家族構成		経済状況		家族・親戚の援助・支援			住 宅 状 況			
	長男夫婦と孫2人の 5人家族		年金生活		主たる介護者は長男の嫁			2階建て 4LDK, バリアフリーなし			
	現在利用している福祉サービスおよび社会資源							仕 事 歴			
	××デイサービスセンター、配食サービス。 今まで、センターの利用はなし。							主婦、内職 (洋服)			

出典: (財)日本レクリエーション協会組織部人材担当「福祉レクリエーション・ワーカー通信教育養成課程資料」を一部加筆修正。

表 2：レクリエーション活動援助の目標設定シート

利用者氏名	A. M	記入年月	〇〇年××月△△日	記入者氏名	〇 〇 × ×
①レクリエーションニーズの評価 (プラス条件)		②レクリエーションニーズの評価 (マイナス条件)			
<p>1) ADL の側面 日常生活において問題なし。</p> <p>2) 心理的側面 よく話をされる。以前は話し好きだった。</p> <p>3) 過去の活動歴 生け花、書道、園芸</p> <p>4) 現在の活動 なし</p> <p>5) その他の関連情報 長男夫婦と孫2人の5人家族、 年金生活、主婦であった。</p>		<p>1) ADL の側面 白内障(右 0.5, 左 0.3), 左耳難聴(会話は問題なし)</p> <p>2) 心理的側面 うつ傾向</p> <p>3) その他の関連情報 特に最近になって自宅にこもり、うつ傾向である。</p>			
③考えられる到達目標 (考えられるだけいくつもあげましょう)		④到達目標の整理と順序づけ			
<ul style="list-style-type: none"> ・ デイサービスセンターにおいて、生け花と書道の余暇を活かし、「生け花と書道クラブ」に入会することで、仲間との交流を図る。 ・ デイサービスセンターにおいて、生け花と書道教室を開き、教室の講師となる。 ・ デイサービスセンターにおいて、仲間づくりを行いうつ傾向を改善する。 ・ デイサービスセンターのグループ同士の観光旅行(日帰りまたは1泊2日)に参加して、気分転換を図る。 ・ デイサービスセンターにおいて、生け花と書道を行い仲間同士の交流を図る。 ・ デイサービスセンターにおいて、「生け花と書道クラブ」で仲良くなった友達とともに地域への作品発表を行う。 		<ol style="list-style-type: none"> 1) デイサービスセンターにおいて、仲間づくりを行い、うつ傾向を改善する。 2) デイサービスセンターにおいて、生け花と書道を行い、仲間同士の交流をはかる。 3) デイサービスセンターにおいて、生け花と書道の余暇を活かし、「生け花と書道クラブ」に入会して仲間との交流を図る。 4) デイサービスセンターのグループ同士の観光旅行(日帰りまたは1泊2日)に参加して、気分転換を図る。 5) デイサービスセンターにおいて、生け花と書道教室を開き、教室の講師となる。 6) デイサービスセンターにおいて、「生け花と書道クラブ」で仲良くなった友達とともに地域への作品発表を行う。 			

出典：(財)日本レクリエーション協会組織部人材担当「福祉レクリエーション・ワーカー通信教育養成課程資料」を一部加筆修正。

4. おわりに

上記の通り、検定教科書から示されるレクリエーションの理解とその展開を踏まえた上で、以下に若干の考察を試論する。

- ① 社会福祉分野において、一般的には「レクリエーション＝グループワーク」として理解されてきた経緯がある。しかし、今後の福祉領域におけるレクリエーション援助は、利用者個々の価値観への確認と個人への生活支援がより一層求められてきている。つまり、非日常的且つ集团的活動として理解されてきたレクリエーションが、社会福祉領域においては、日常生活全体を視野に入れた個別支援型レクリエーション援助として理解されてきており、レクリエーションイメージとその内容の転換が求められてきている。
- ② 援助者の経験論によって支持されてきた福祉現場における実践が、公的介護保険制度及び障害者自立支援法の導入によって、利用者やその家族から選ばれるサービスのあり方へと変革してきた。このことは、サービスにおける費用対効果が検討され、ケアの科学化が追及されることに繋がる。すなわち、レクリエーション援助の効果検証が求められ、特にレクリエーション援助の実践と評価に大きな関心が寄せられてきている。
- ③ ②の実現のためには、本報告で示した A・PIE プロセスを援助の基軸に置き、明確な目標設定と実践及び評価への検証など、循環型サービスの展開とその評価が求められる。
- ④ 先述の平成 14（2002）年 8 月 29 日、文部科学省検定教科書『社会福祉援助技術』検定意見通知において（文部科学省初等中等教育局）、福祉サービス利用者の「エンパワメント」が強調された。このことは、利用者がバックメニューとしての福祉サービスを画一的に受けるのではなく、個々人が置かれている生活背景とその周辺的生活環境等の力動性を総合的にアセスメント（事前評価）し、利用者がサービスの主体者であり、自らの生活課題を解決する最大の援助の所在は、自らの能力向上によるものであることを、レクリエーション援助の中で意識づけし、具体的行動に移せるよう支援する計画的援助がより一層求められよう。

<注>

- 1) 例えば、社会福祉法人九州キリスト教社会福祉事業団 特別養護老人ホームいずみの園が早期から少人数構成へのケアを試み、高い水準のケアサービスを展開し、全国的にも注目を集めている。年間の施設見学者は 1500 名を超え、施設フェスタ開催時には、地域住民が 2000 人を超え、地域福祉交流を積極的に展開している。
- 2) 拙論「痴呆性老人専用棟におけるレクリエーション援助に関する研究—利用者の余暇歴と個別援助技術の関連を中心として—」福祉文化研究第 7 号、日本福祉文化学会、pp.35-43. 1998 年。（平成 9 年度老人福祉施設実践研究奨励賞受賞）。
- 3) 拙論「福祉レクリエーション援助の全体像」福祉レクリエーションシリーズ I 『福祉レクリエーション総論』。（財）日本レクリエーション協会監修、中央法規出版、pp.25-133. 2000 年。
- 4) 拙論「高齢者のレクリエーション援助」、『レクリエーション援助』。滝口 真他編、金芳堂、pp.88-98. 2002 年。